

(一)

武田ミキ先生を偲んで

宮本 昂

昨年十二月二十七日午前七時五十分、私共は深い悲しみのどん底に陥った。誰もが心から尊敬し、お慕いしていた武田ミキ先生が逝かれたのである。

一 昨年三月体調を崩されて市民病院に入院された。何分にも御高齢なのでぜひぶん心配したのであるが約半年で退院され、自宅で療養されていたが、家族の方々の、また、ゆかりの方々の手厚い看護にもかかわらず、遂に以前の元氣なお姿を見ることも出来ないままに、新しい年を待たずに大往生なさったのである。きれいな、おだやかなお顔であった。今にも目を開かれるのではないかと思われるほどであった。悲しい事である。

ミキ先生に初めてお会いしたのは昭和三十二年、高等学校の開校の年の三月であった。それから三十六年の間、ぜひぶん沢山の事を教えて頂き指導を受けた。今静かに振り返って見ると、毎日毎日が悲しい、また、なつかしい

四、ミキ先生とともに生きて

思い出である。

私は昭和三十八年に母を亡くした。急性肝硬変で、私共の願いも虚しく昏睡状態になったとき、一緒に涙を流して下さった事を私は一生忘れ得ない。母が亡くなった後は、私はミキ先生を、第二の母の様な気持でお慕いしていたし、先生も「お母さんの言うことだからよくききなさいよう」とよく御指導頂いたものである。

昭和五十一年の夏だったと思う。毎年八月十七日、十八日の二日間、全国教職員弓道大会が行われていて、たままその年は、伊勢神宮の弓道場で開催されることになっていた。私もそれに出場したのであるが、出発する前の御挨拶で「先生、伊勢に行くのですが、何を土産に買って帰りますしょうか」と云ったら「いや何もいらぬ。五十鈴川の水を持って帰って欲しい」と云われた。丁度数年前から書道に熱心でよく学長室で書いておられた。五十鈴川の清い水で墨をすって書きたいと云うお気持である。

「五十鈴川の水でも大田川の水でも変わりはない。何も伊勢から水を持って帰らなくても……。」と思う人もあるかも知れない。いや、それが普通の考えである。然し私には先生のお気持が痛いほど分かった。大きなポットを持って行って、五十鈴川の水を一杯汲んで帰って大変喜ばれた思い出がある。

「教育に生き、教育に死する」と常に口にされていたミキ先生、その言葉どおりの人生を全うされた。「努力には花が咲き、実がなる」本当に努力一点張りで現在の学園を築かれた先生、頭が下がる思いである。

高等学校の校長をなさっていた頃、よく朝礼訓話などで生徒に話された言葉の中に、「事を行うに当たって大切なことは、『一、正しく判断する。二、勇敢に決断する。三、着実に実行する。』の三つである」と教えられた。

私共が人生を送ってゆく中で、非常に大切なことであり、そのとおりの道を歩まれた先生に頭が下がる思いがす

四、ミキ先生とともに生きて

る。

私の人生の半分を、先生のもとで過ごさせて頂いた私は本当に幸せ者であったと思う。学園の発展をいつまでも見守って頂きたいと、祈っている。